第３講

がんばれば、敵方の武士も味方になってくれるだろう
ー南北朝の動乱は、なぜ長期化したのかー（2003 度第２問）

次の(1)～(3)の文章を読んで、南北朝内乱に関する下記の設問Ａ・Ｂに答えなさい。

(1)　南北朝内乱の渦中のこと、常陸国のある武士は、四男にあてて次のような譲状をしたため、その所領を譲った。

長男は男子のないまま、すでに他界し、二男は親の命に背いて敵方に加わり、三男はどちらにも加担しないで引きこもってしまった。四男のおまえだけは、味方に属して活躍しているので、所領を譲り渡すことにした。

(2)　1349 年に高師直のクーデターによって引退に追い込まれた足利直義は、翌年京都を出奔して南朝と和睦した。直義はまもなく京都を制圧し、師直を滅ぼした。その後、足利尊氏と直義が争い、尊氏が南朝と和睦した。

(3)　1363 年のこと、足利基氏と芳賀高貞との合戦が武蔵国で行われた。高貞は敵陣にいる武蔵国や上野国の中小の武士たちを見ながら、次のように語って味方を励ましたという。

あの者どもは、今は敵方に属しているが、われわれの戦いぶりによっては、味方に加わってくれるだろう。

設問

Ａ　当時の武士の行動の特徴を、２行（60 字）以内で述べなさい。

Ｂ　南朝は政権としては弱体だったが、南北朝内乱は全国的に展開し、また長期化した。このようなことになったのはなぜか、４行（120 字）以内で述べなさい。

解いてみましょう（第２講）Ａについて

１　問われている（求められている）ことを確認する。

ア　（イ）　時代の　（ア）　について書く。

イ　２行（60 字）以内で書く。

※「○○時代の特徴」を書く場合は、それ以前、あるいは以後との相違点を書く！

２　資料と教科書の内容とを照らし合わせる。
関する教科書のページと内容は、

教科書の

⇩

３　与えられた資料と教科書の記述から抜き出して作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の「関連する教科書のページと内容」からの抜粋も記されています。

東大チャート「南北朝内乱時代の武士の行動の特徴」（2003 年度第２問設問Ａ）

（［　　］へは、ほぼ抜き出して入れる。［　　］へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。）

【教科書の記述】
（鎌倉時代の武士は）一族の血縁的統制のもとに、宗家（本家）を首長と仰ぎ、活動を広げていった。この宗家と分家との集団は、一門・一家と称され、宗家の首長を惣領（家督ともいう）、他を庶子と呼んだ。戦時には、一門は団結して戦い、惣領が指揮官となった。平時でも、先祖の祭や一門の氏神の祭祀は惣領の権利であり、義務でもあった。こうした体制を惣領制と呼ぶ（略）
（P104. L25～P105. L11）

【教科書の記述】
鎌倉時代後期頃から始まっていた惣領制の解体があった。この頃、武家社会では本家と分家が独立し、それぞれの家の中では嫡子が全部の所領を相続して、庶子は嫡子に従属する単独相続が一般的になった。こうした変化は各地の武士団の内部に分裂と対立を引きおこし、（略）（P123. L28～8）

(1)　南北朝内乱の渦中のこと、常陸国のある武士は、四男にあてて次のような譲状をしたため、その所領を譲った。
長男は男子のないまま、すでに他界し、二男は親の命に背いて敵方に加わり、三男はどちらにも加担しないで引きこもってしまった。四男のおまえだけは、味方に属して活躍しているので、所領を譲り渡すことにした。

(3) 1363 年のこと、足利基氏と芳賀高貞との合戦が武蔵国で行われた。高貞は敵陣にいる武蔵国や上野国の中小の武士たちを見ながら、次のように語って味方を励ましたという。
あの者どもは、今は敵方に属しているが、われわれの戦いぶりによっては、味方に加わってくれるだろう。

鎌倉時代の武士は、戦時には［①　　］を指揮官として［②　　］が［③　　］して戦っていた。

しかし、鎌倉時代後期から［①　　］制の［④　　］が進み、［⑤　　］の内部に［⑥　　］と［⑦　　］が起こっていた。

南北朝時代の武士は、［①　　］である父親の命に子が背いて［⑧　　］に加わったり、［⑨　　］になった息子には［⑩　　］が譲り渡されるなど、［②　　］でも［⑪　　］によって［⑧　　］と［⑨　　］に分かれた。

合戦の最中でも、［⑫　　］によって、［⑧　　］と［⑨　　］が変化することがあった。

抜き出したものをまとめる

①　の指揮のもと　②　が　③　して戦うという

①　制が　④　し、　⑤　の　⑥　と

⑦　が起こっていた。そのため、それぞれの　⑤　が、

その時の　⑪　や　⑫　に応じて、　⑧　と

⑨　に分かれて行動した。

4　60 字に要約する。

解いてみましょう（第２講）Ｂについて

１　問われている（求められている）ことを確認する。

南朝が政権としては弱体だったにもかかわらず、

ア　南北朝内乱が［　　］した理由を書く。

イ　南北朝内乱が［　　］した理由を書く。

ウ　４行（120 字）以内で書く。

２　資料と教科書の内容とを照らし合わせる。

関係する教科書のページと内容は、Ａの問題に関して示した箇所及び

教科書の

⇩

３　与えられた資料と教科書の記述から抜き出して作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の「関連する教科書のページと内容」からの抜粋も記されています。

東大チャート「南北朝内乱が全国的に展開し、長期化した理由」(2003 年度第２問設問Ｂ)

(　　へは、ほぼ抜き出して入れる。　　へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。)

※ 設問Ａと同じ語句が入る空欄にも、新たに番号を付している

(2) 1349 年に高師直のクーデターによって引退に追い込まれた足利直義は、翌年京都を出奔して南朝と和睦した。直義はまもなく京都を制圧し、師直を滅ぼした。その後、足利尊氏と直義が争い、尊氏が南朝と和睦した。

【教科書の記述】

鎌倉幕府以来の法秩序を重んじる直義を支持する勢力と、尊氏の執事高師直を中心とする、武力による所領拡大を願う新興勢力との対立がやがて激しくなり、ここに相続問題もからんで、ついに1350(観応元)年に両派は武力対決に突入した(観応の擾乱)。抗争は足利直義が敗死したあとも続き、尊氏派(幕府)、旧直義派、南朝勢力の三者が、10 年余りもそれぞれ離合集散を繰り返した。このように動乱が長引いて全国化した背景には、すでに鎌倉時代後期頃から始まっていた惣領制の解体があった。この頃、武家社会では本家と分家が独立し、それぞれの家の中では嫡子が全部の所領を相続して、庶子は嫡子に従属する単独相続が一般的になった。こうした変化は各地の武士団の内部に分裂と対立を引きおこし、一方が北朝につけば反対派は南朝につくという形で、動乱を拡大させることになった。(略) 動乱の中で地方武士の力が増大してくると、これらの武士を各国ごとに統轄する守護が、軍事上、大きな役割を担うようになった。幕府は地方武士を動員するために、守護の権限を大幅に拡大した。

(P122. L23 ～P123. L12)

(3) 1363 年のこと、足利基氏と芳賀高貞との合戦が武蔵国で行われた。高貞は敵陣にいる武蔵国や上野国の中小の武士たちを見ながら、次のように語って味方を励ましたという。

あの者どもは、今は敵方に属しているが、われわれの戦いぶりによっては、味方に加わってくれるだろう。

1349 年の高師直のクーデターをきっかけとして、1350 年に、室町幕府内で足利氏の内紛である ① が始まった。足利尊氏と足利直義の両派は、② 応じて、③ と和睦するなど、三者は 10 年余りも ④ 。

その背景には、武家社会では ⑤ が一般的になったことで ⑥ の内部で ⑦ と ⑧ がおこっていたことがある。

① は、地方武士を統轄する ⑨ の ⑩ を巻き込み、彼らが軍事上、大きな役割を担うようになった。また武士たちは合戦の最中でも ② に応じて ⑪ と ⑫ が変化することがあった。

このような状況において ③ は、⑥ にとって ⑬ 方を名乗る武士と戦うことを ⑭ し、⑫ を得るための ⑮ となるなどの ⑯ 。

抜き出したものをまとめる

武士社会では、⑤　　が一般的になったことで　⑥　　の内部で　⑦　　と　⑧　　がおこっていた。そのような状況のなか、室町幕府内で　①　　が始まり、地方武士を統轄する　⑨　　の　⑩　　を巻き込んだ動乱に発展した。

足利尊氏と足利直義の両派が、　②　　に応じて　③　　と和睦するなど　④　　ように、武士たちは合戦の最中でさえも　②　　に応じて　⑪　　と　⑫　　が変化することがあった。そのため　③　　は、　⑥　　にとって　⑬　　方を名乗る武士と戦うことを　⑭　　し、　⑫　　を得るための　⑮　　となるなどの　⑯　　。

4　120 字に要約する。

今回、問題を解くことで学んだこと